

全体討論

大塚 雄 作 (京都大学高等教育研究開発センター教授)

(大塚) それでは、ディスカッションに入りたいと思います。たくさんの質問票が来ておりまして、それをこなすだけでもちょっと大変そうです。まず最初に報告者の方々から補足などがあればしていただき、また、質問票を見てそれに答えていただきます。お一人数分をめぐり、5分を超えないように1ラウンド目は回ってみたいと思います。それでは、森さんの方からお願いできますでしょうか。

(森) ありがとうございます。早速いただいたご質問にお答えできる範囲でお答えしようと思います。

一つは、なぜ自学自習を含む単位制度が戦後に日本に根づかなかったのかというご質問をいただきました。これは、今の単位制度は戦後に入ってきたわけですが、わが国において戦後初めて大学ができたわけではなくて、明治以降の帝大型のレクチャーモデルが既に根づいていて、そこから発想の転換ができなかったのではないかと思います。こういうことは恐らく桜美林の館先生などもおっしゃっていると思うのですが、多分それで多くのことは説明できるのではないかと思います。

もう一つは、時間ではなくて、成果で見る方法としては具体的にはどういうことがあり得るのかというご質問で、これは幾つか同様の質問をいただきました。時間による単位制から、成果だけの成績付けというか、学位に至るシステムは、近年においてはまだ実現していないわけです。これに関してはいろんなことを言う方がいらっしゃいます。例えば全国統一試験という直接指標を用いるべきであるというようなご意見もあります。本日の森本さん、伊藤さん、澤登さんのご報告にも部分的にありましたけれども、医学の共用試験や数学のEMaT、それからTOEFLなどは直接指標として使われるわけです。ただ、いずれにしても大学が教育機関である以上、テストをしてはクレジットを出し、テストをしてはクレジットを出しというふうにはならないと思うのです。時間には意味があるわけで、この時間が全部無視されるということは未来永劫、多分ないと思います。これは同様のご意見をいただいております。

時間か成果かという議論は、どちらに重心を置くかという議論になるのだと思います。アメリカで先行している議論などを見ますと、統一試験などをクレジットに用いることによって、今ある時間の指標、時間の枠組みを低く割り込んでいいのではないかとというような議論であるという理解でいいのではないかと思います。お答えになっていればいいと思います。

(大塚) 溝上さん、お願いします。

(溝上) いろいろ面白いご質問をいただいています。私が今日伝えたいところにかかわるものを二つお答えいたします。

一つは、私は申し上げているつもりなのですが、授業外学習時間が伸びると学生の意欲が増すとお考えかというご質問です。今、授業外学習は広島や創価大など、こんなのはちょっと特別でありまして、全般的には私が示したような授業外学習時間というのが実態だと思います。澤登先生のスライドは1日の時間で、私のは1週間の時間です。後で個別に「あれは1日の平均ですか」と聞かれましたが、あれは1週間の全体時間数です。とにかく大学によって、あるいは学部学科によって実態はだいぶ違うのですけれども、全体で見るとこういう結果が、本当にどこでどういうふうにとっても結構出てくるのです。とにかく時間数が短いという感じがあります。これを延ばしていくところに最初の取り組み、私たちの喫緊の課題があるのではないかと何回も何回も申し上げているのです。質を考える前に、まず量を上げることです。5時間は短すぎるのです。平均して大体10時間、15時間ぐらいは少なくとも出てくるということが目指されるべきだと思います。これが一つです。

このようにしていくと、やらされて伸びてくるという学生が出てきますので、それが意欲に絡んでくるかといった

ら、絡んでこなくなる可能性があります。そうなってくると、質ですね。例えば、授業や学習のプロセスのパフォーマンスということがあります。同じようにレポートを書く、あるいはプレゼンテーションの準備をする、調べ学習をする中においても、その取り組み方の違いがありますよね。自分なりにこだわって仕上げていく人と、先ほどの森本先生ではないですが、とにかくぱぱっと仕上げて何か出来上がるということでは大きな違いがあります。そういう質を見ていくということを考えていますので、まず当面は量、それが形になってきて関連を見せなくなってくると質という段階で先の数年を考えています。

他方で、もう一つこの話がとても大事なのは、授業外学習時間をなぜこんなに伸ばせ、伸ばせと私が言っているのかということ、単位制度の法遵守のためだけではありません。それはもちろんあるのですけれども、私はどちらかというと、これは都合よく使っているだけです。やはり最近の一般的な言い方でいうと、知識の習得というものが今まで伝統的な授業や学習のスタイルであるとすれば、これをないがしろにははいけません、これからはそれを踏まえて知識の活用を目指していく。それは、広い意味でアクティブラーニング型の授業ということになってくると思います。PBLもその一つだと思います。

こういうふうに考えていくと、授業外学習時間が出てこざるを得ないのですね。そこが伸びるということは、逆に授業形態、あるいはここは伊藤先生のお話にもありましたが、授業のデザインや授業の仕方を変えていくということと連動します。私は授業外学習の時間のことだけを言っていますけれども、そういったものをいろいろ組み込んで考えています。

授業外学習時間というのは、単に授業外でいろいろ勉強するというだけではなくて、学生は授業でいろいろ知識を与えられますけれども、真っ白な状態でそれを獲得しているわけではなく、それまでいろいろなことを学んで、その上に新しい知識を重ねて自分なりにつなげて構成して理解しているわけですね。ですから、同じ内容の授業を受けても、学生によっては違ったように理解したり、感じたりするということがあるわけです。ディスカッションして、今の学んだことをどういうふうにしたか、考えたかをみんなで出し合ってみましょうということ、同じ話を聞いたのに何か全然理解が違うということになるわけです。そういったことをじっくり自分の時間の中で考えていくためにも、授業外学習時間は私は大事だと考えているわけです。

そういった知識の構成というのでしょうか、主体の中で知識をわが知識としていく時間をしっかり取っていく必要がありますので、現行の授業外学習時間数では全然話にならないと思っています。12時間というのがアメリカの現行の平均時間数で、これはかなり減ったということなのですが、当然アメリカでも単位制度の観点から見ると全然駄目なので、アメリカでもこれから議論になっていくのかなと思います。

もう一つのご質問です。こういう質問を下さってありがたいのですが、結局、学習時間をとにかく伸ばせ、伸ばせという話になっていて息が詰まる、こういうのは教員も含めてしんどい。全くおっしゃるとおりですが、私はこの手の問題では、こういうことをよく考えます。例えば澤登さんのご発表を聞いて、こんなに学生が学習していたら、どこで遊ぶのだと思われるかもしれません。でも私は、学生は遊ぶと思います。どんなに大学で時間をかけて学習させても、遊ばないということはないと思うのです。だから、遊ぶことに関しては心配しないでいいと思います。夏休みとか春休みとか、大きな長い休みの時間もありますし、もちろん土日まで引っ張って学習させているわけではありません。そういうところで準備のために時間外学習をするということはあると思いますけれども、全体として全く1週間勉強漬けで受験みたいになることは、大学生に関してはないと思いますので、ここは心配しなくていいと思います。

ただ、心配しなければいけないのは、私の立場でいうとキャリアです。もちろん医療系などは、森本先生の顔が見えているのですごく気になって分かりやすいのですが、こういうところはちょっと別だと思いますが、一般的に考えれば、キャリアは大学がしっかり学生に指導の機会を与えて作っていかないと、自分たちでは勝手に考えまので、これは遊びとはだいぶ話が違う問題だと思います。

そういうことで、私は少なくとも授業時間は長すぎると思います。長すぎるといっても、また森本先生の顔が見えていますので、ちょっと違う話になりそうですけれども、授業外学習時間は一般的にもう少し伸ばす方向で考えるべきだというのが私の考えです。

(大塚) それでは、森本さん、お願いします。

(森本) 私のところにも少しご意見をいただきました。実はほとんど溝上さんが答えられたのですが、一つは、ああいうモジュール式の授業をすると、詰め込みが簡単なだけに、ひたすら学生は過去問だけで勉強するという形です。だから、今日話したことは悪い例といってもいいぐらいです。教員の方も、組む方も、時間外というか授業外学習を意識していないのですね。テストでも過去問で通るような試験をするから過去問を勉強するのであって、何だかんだ言っても実はこっちが悪いのです。

公開授業で前に見ていただいた授業などは内職しようがないのです。というのは、授業中はディスカッションだけをさせて、試験で問うような知識に関しては自分で勉強しなさいという形です。先日も試験をして、落ちた学生がやってきました。必修ですから、落ちたら再試験を求めてくるのです。「きちんと過去問で勉強していたけれど全然通用しなかった。授業中に言われたことが出ませんでした」。「当たり前だ」と一言答えて帰したのです。そのまま彼は来年もう一回受験です。そういうように、教員サイドが授業時間外の学習や試験の形態など、そこまで考えないと、単位制だけを考えても恐らく同じような状況になるのではないかと考えています。

もう一つ別の方からは、今から医学部定員が増えるのでどうしようかということですが、一言で答えると、リソースに限られていますから、定員が増えたら授業の質が落ちます。これは仕方がないことです。いろいろな事情がありますが、もうちょっと教育リソースが欲しいと考えています。ああいう詰め込み授業ばかりやっているのは、仕方なくやっているところもあるのですが、リソースがもうちょっとあれば、もっとゆとりが増えるのではないかと考えています。

(大塚) 伊藤さん、お願いします。

(伊藤) 幾つかの質問にまとめて答えさせていただきます。まず、効率化に関してご質問いただきました。例えば、週2日授業のメリットとして効率化があったと挙げているけれども、短期間で身に付けた知識は短期間で消えるであろう、ないしは長い時間をかけて勉強したらいいのではないかと、週複数回授業のデメリットについてどうかということです。もちろん、すべて何もかも効率化するのがいいとは私も思いませんし、無駄はむしろ必要だと思います。ただ、ほかのご質問にあったのですが、数学は工学部の卒業単位の中で平均すると20単位程度、多いところだと24単位ぐらいあります。20単位はほぼ必修に近い形で、それが1年生、2年生、場所によっては3年生まで継続してありますので、のりしろ的な、同じことをまた別の科目で復習するということは、どの科目でも必ずあります。のりしろは十分にあるのですが、ちょっとだけそののりしろをいただいて、少し効率化させてもらおうということです。その代わりに、のりしろがたくさん必要な学生には、それこそ時間外に学習支援室のようなサポート体制が整ったところに行って学習してもらおうということです。ですから効率化といっても、本当に効率化していけない部分と、効率化してもよい部分と、ある程度切って分けて考えています。

それから、週複数回授業のデメリットに関してはあまり申し上げませんでしたけれども、教員、学生双方からそれほど深刻なデメリットは今のところ出ていません。1点、時間割が非常にリジッドですので、それを変えるということがとても大変で、そこがどちらかというハードルになります。あとはこのような授業がそれほど多くありませんので、特化した教材が少ない、もしくはないというあたりかと思えます。

もう1点、単元クレジット制に関して不合格者の扱いはどうなるのか。これは、1個のクレジットしかもらっていない人は不合格という扱いです。インコンプリートと考えていただいて結構です。担当者間ですべての情報を共有し、次の年の担当者は前の年の成績状況をすべて把握しています。もちろん同一科目に関してはシラバスとその他すべてを共通にしておりますので、情報共有することで次の年につなげることができます。

(大塚) 澤登さん、お願いします。

(澤登) 何点かまとめて回答させていただきます。まず、このプログラムの輩出する学生像ですが、スライドの4番

にもありますように、基本的に私たちの認識としては海外の大学院、また国際的企業や国際協力機関、場合によって海外にはこだわらずに、これまで創価大学としてはなかなか複数の学生を毎年送り込めないような日本の一流企業なども想定しています。

その上で、かなりエリート教育ではないかというお声もいただき、学内にも確かにそういう声があります。また、勉強一辺倒の学生生活でいいのか、もっといろいろなことをした方がいいのではないかという声も出てはいますが、あくまで学問中心のプログラムとするというスタンスです。

これは事実として、東大・京大、また関西・東京の入学難易度の高い私大に合格しても、本学の創立者を慕い、建学の精神に共鳴した学生がたくさん来ます。これまではその学生へのケアは、あまりなされていませんでした。先ほどもお伝えしましたように、中・低位層にこれでもかというぐらいのケアを今もしています。一方で、先に述べた入学難易度の高い大学を蹴ってまで本学に来た学生からは、「もっとレベルの高い授業はないのか」という声もたくさんいただいていますので、その辺の上位の声を拾い上げたプログラムとして位置づけています。

また、他学部との比較なのですけれども、例えばスライドの4番で今入っている1期生の1次選抜の合格者が75名、最終的に32名を採用して、43名が2次選抜で漏れていますが、この43名については継続的にセメスターのGPAや、4年間で何度も実施しているTOEFLの結果について全部把握してGCP学生との比較も随時行っています。おむね選抜に間違いなかったという結果が出ていますが、中には1～2名取り損ねたかなという、優秀な学生で2次選抜で漏れた方はいらっしゃいました。

スライド6にもありますように、このプログラムは基本は4年間なのですけれども、集中的に2年間を想定しています。ほとんどの授業は2年間で終わり、3年生からはチュートリアルを中心とした形になっています。途中からはこのプログラムには入れません。3年生からは、例えば海外の大学院を志望するGCP学生がいたら、海外の大学院を修了したGCPの担当教員をチュートリアルに付けて進路対策をしっかりと個別に行うということを考えています。まだ3年生が出ていませんので、どうなるかは何とも言えませんが、そういう形で3年生からは進路対策の徹底した個別指導に入っていく予定です。

かなり学生生活がハードになっているのではないかというご質問も何件かいただきました。確かにかなりハードで、学生は毎日深夜2時、3時まで勉強しています。1セメスターと2セメスターの終わりにそれぞれラップアップミーティングをして、32名全員に一言ずつ話してもらいましたが、特に前期のラップアップミーティングでは、ほとんど泣きながら「こんなに苦しいとは思わなかった」「大学に入っても浪人しているみたいだ」など、いろいろな声がありました。チュートリアルおよびチュートリアルの教員ではなくても、GCPラウンジに常駐している教員が、とにかく個別に多くの時間を取っては個人をケアしています。また一方で学長・理事長との会食会を設けたり、いろいろなOBとの接点を設けながら意識を維持・啓発するように努めております。

(大塚) 第1ラウンドを見事にまとめていただきました。

そもそもこのシンポジウムのテーマを単位制度と決めました一つの理由に、最近、単位制度の趣旨よりも、授業を15回行うことだけに力点が偏ってきている風潮に反発を感じたということがあります。私は、大学評価・学位授与機構の大学機関別認証評価委員会の委員をしておりますが、例えば、先日の委員会でも、認証評価結果の留意点として、授業が15回行われているかどうかということまではチェックされていないのですけれども、学事暦で15週とにかく授業の時間を確保されているのかということはチェックする、確保されていなければ改善点に書くという方針で今年度の認証評価を実施しましたという機構からの説明がありました。私は、授業を15回やるということで「単位制度の実質化」がなされているという判断を下すのはいかにも無謀ではないのかという問いかけをしたのですが、何かのれんに腕押し雰囲気がありました。

私自身もどちらかというところ溝上さんの意見に近く、単位制度の趣旨は、授業外でいかに学習を確保していくか、そちらの方の取り組みが重要だろうと思っています。その点で、15回だけということが最近強調されて、15回やっていたらよしとされてしまうという評価になってはおかしいのではないかということも含めて、私自身は、今回のシンポジウムで改めて考える機会にできればと思っていました。

また、日本の学生はあまり勉強しないというデータも出ていましたが、恐らく卒論やいろいろな国家試験の前には

日本の学生は割と集中的に勉強していて、トータルで、それこそ単位制度でいわれている勉強時間が確保されているとは平均では言えないかもしれないけれども、それに遜色ない総勉強時間を確保している学生も相当数いるのではないかと思います。逆に、全ての科目について単位制度そのものに従った勉強時間を達成している学生は有史以来、日本では1人もいないと私は確信を持っているのですが、124単位というと45を掛けて5580時間になるのでしょうか、トータルでそれ以上の時間、何らかの勉強をしている学生は多くいるだろうと思います。

そのことで何を言いたいかという、自分が勉強したいところなど、メリハリを付けてやるということの方がむしろ大事なのではないかということです。その柔軟性をいかにわれわれがお互いに共有していくことができるのか、今の大学の教育システムの中でそういった柔軟性を生かしていく方法はないのかということで、モジュール制、週2回制などの工夫、オナーズ・プログラムの試みなど紹介していただいたということです。しかし、みなさんのお話を伺っていて、授業科目も学生も想像以上に多岐にわたっていることに気づかされました。例えば、オナーズ・プログラムは、2・6・2の法則というのがありますが、その上の方の「2」を引き上げることによって全体のレベル向上を図るアイデアと位置づけられるのだらうと思いますが、全体的に自学自習をもっと徹底する方策を講じなければいけないということだけに固執するのは、少し文系に偏った考え方だったかなという反省もしております。もちろん、逆に、それぞれの大学の背景と文脈のなかで行われているそれぞれの取組も、自らの確に捉えられていましたように、一つ一ついろいろな問題点が含まれているということにも気づかされました。学生の多様性がある中で、あるいは領域の多様性がある中で、単位制度の趣旨をどう捉えていけばいいのかという視座がもう一つ必要になるなというのが、私自身の感想といえますか、気づかされた点と言うことができそうです。松下さん、全体に、何かありますか。

(松下) 質問でもよろしいですか。伊藤さんに私はお尋ねしたいのですが、こういうプログラムを組んで実施していくときに、どういう形で教員の合意を取り付けてこられたのでしょうか。

(伊藤) これは先ほどちょっと触れられなかった質問にも関係します。先ほど、成績更新型履修制度に関して、単位認定後の成績向上は大学の教育の結果か、それはどう正当化されるのかという質問をいただいたのですが、これはわれわれのところでも当然、かなり初期の段階で出てくる議論です。結果的には、むしろメリットの方がデメリットをかなり大きく上回っているということがあって、担当者間で合意した上で教員の方々に啓蒙してゴーサインをいただいているのです。

一つは、工学部はほとんどの基礎科目はみんな必修、必修で積み重ね式になっていっています。工学部では典型的に4年生のときに研究室配属があり、研究室に行って、それから大学院に行く人、就職する人、いろいろな進路の分岐点があります。そこで成績をシビアに使います。例えばGPAです。GPAを非常にシビアに使うということから、学生は成績に関してものすごく敏感になっています。

例えば数学の授業で、必修科目であるにもかかわらず、60点で可だったら「僕は来年もう一回受けますから不合格にしてください。秀でないと成績は要りません」という学生がだいぶ多くて、個別に言ってくる学生がいます。そうしますと、次の年に必修科目を落とすと、当然それで留年する可能性も高くなりますし、私たち教員の方としては「60点でもいいから、次の年にもう一回受講して、いい点を取ってくればそれでいいのだけれどもな」という気持ちがあるのですけれども、一度合格してしまった者は、ルール上それはできないわけですね。

でも、工学部ですので、年次が進行するに従って基本的な数学はどんどん使います。当然、勉強しないと研究室に行ってから困りますし、とにかく継続学習をした上で、60点でクリアしてもいいから、その後もっと勉強してくれというわけです。それはもちろんわれわれがサポートします。単位を出す責任はそれを教えたときの先生にありますけれども、その先生は、もちろん単位を与えるのに必要な方法論や考え方など、最低限のことは教えているわけです。その上で合格を出しています。あとは、教えたことに従って、その上に継続して学習してほしい。決してどこかのテストでいい点を取ったら無条件で単位をあげますよという制度ではなくて、客観テストにしても、われわれの方で提唱しているシラバスに基づいた試験になっていますので、考え方としては、むしろ次の年にもう一度履修してテストを受けてもらって、その上で、前の年よりもとてつもなくいい成績を取ったらばという、かなりハードルを上げて担当者の方々の合意を得ています。ですから、それこそ単位制度そのものに関する議論が非常に多くあります。けれど

も、それはメリット、デメリットを見ていただいた上で、現行の範囲内でどこまで可能かということを経験した上で納得いただいています。

(松下) 多分、成績更新型履修というのは、教員の方はそんなに苦労しなくても済みますし、メリットが非常に見えやすいので、あまり問題ないと思うのですが、単元クレジット制だと、例えば今までは1回しか試験をしていなかったのに2回しなければいけない、あるいは週複数回になると今までの授業の組み方を変えないといけない、カリキュラムの時間割を調整しないとけないなど、いろいろ負担が出てきますよね。そういうことに関してはいかがですか。

(伊藤) 単元クレジットの方は、科目ごとにいろいろ性格が変わっています。例えば前半はこういう話題、後半はこういう話題と本当に真ん中でぴったり分かれるようなものは従来まで中間テストといった形でやってきましたので、それをちょっと焼き直ししています。場合によってはクレジットを3分割するというのも可能です。その場合は、2単位に対して3分の2単位というのは存在しませんから、逆に言うと、そういった形でクレジットを与えた方が柔軟性が高くなると考えています。

その負担に関しては、従来のものからそれほど逸脱していないので、単元クレジット制に関してはそれほど教員の方のハードルはありません。ただ、例えば週複数回授業などに関しては、特に非常勤の方が絡んでいたりしますと、時間割の調整がとても難しいです。先ほど医学部のカリキュラムがありましたが、工学部の学生も1~2年、3年の真ん中ぐらいまでは必修があって、ほとんどの時間に授業が詰まっていて、一つ変えるとすべて芋づる式に変えて、ひょっとするとそれで解がないということになりますので、なかなか変えられません。ですから、すべてに対して一気に変えるというわけではなくて、できる場所しか今のところまだ手が付けられていないといった状況です。

(大塚) 残り時間も少なくなってきましたので、もう1ラウンドしていただこうと思います。その前に、折角多くの方にここにお集まりいただいておりますので、今までのやり取りをお聞きになって、ここをぜひ聞いておきたいという方はいらっしゃいますでしょうか。では、T先生。

(フロア1) 大阪府立大学のTと申します。よろしく申し上げます。溝上先生と森先生に対してということになるかと思うのですが、授業時間が多すぎると言っているのかどうか知りませんが、キャップ制は努力義務として入っていると思うのです。ただし、あくまで努力義務であって、なおかつ実際にはキャップは恐らくそんなに機能していない。私どもの大学でいくと、50単位ぐらい取っていて、下手をすると2年間で100単位取る学生もいるかもしれません。そういう状況の中で単位制は機能しないのです。50単位を取って単位制を機能させると寝る時間が全くなってしまいます。そこを何もやらずに単位制の実質化をするのは不可能だろうと思います。それをどうしてまずやらないのか。就活の問題があるのは分かっているのですが、そこを別にしてでも、基本的に考えないといけないわけです。先生たちもいっぱい授業が入っているのに、たくさん課題を出せないわけですね。毎日実験があって、レポートがあって、たくさん授業がある中で、課題をたくさん課せないということもあるので、そのあたりのことをどうお考えなのか。よろしく申し上げます。

(大塚) もうお1人、どうぞ。

(フロア2) 熊本学院大学のEと申します。今日の議論の中でちょっと抜けているなと思ったのですが、文科省が単位制度をきちんとしたいというのは、やはり大学の学習の質の問題を考えているからですね。その場合に質をどうやって確保するかというところで量の問題に転化しているのだと思うのです。その場合に、先ほど大塚さんが言われたように、15回さえやれば自学自習はどうであっても文科省はそこまで配慮はしないと思います。しかし溝上さんが言われたように、授業を受けているだけではなくて、基本的に自学自習のバランスが良くないと本当に学生は勉強する効果はないということですね。そうすると、結局、文科省が言う15回という量を確保することが本当に質の確保につながらないのではないか。そういうことをすることが、大学にとって質の確保をしようとするときに逆にマ

イナスになるかもしれないという深刻な議論があってもいいはずなのですよ。

皆さんの議論で、それぞれ自分の立場で努力されているお話はお伺いしたのですが、一体この文科省が実質化しようとしている15回という回数制度が、教育の質の確保について本当に意義があるとそれぞれが思われているかどうかを、一人一人お伺いしたいと私は思います。

(大塚) 私も15回をあまり強調しすぎると、質の保証ではなくて質の低下につながるまで言いたいところですが、さすがに、そういう言い方までは、評価委員会の席では発言できていませんので、その辺も含めて「公論」が大事ですね。それからキャップ制などについても、先ほどの柔軟な対応と共に、私は学生に対するキャップ制の前に教員のキャップ制がないと無理だろうと思っているのです。自学自習に対応する教員の余裕というのか、それは森さんの話にもありましたが、そんなことも思ったりもしているのですが、さて、どうでしょう。今出た話も含めて、自由に論点をピックアップして下さって構いませんので、第2ラウンドとして、森さんからまたお願いします。

(森) まさに今の文脈のお話を議論したいところだったのです。このシンポジウムは単位制度の話をするシンポジウムということになっていますが、単位制度の話は決して単位制度の中だけで収まる話ではないと思うのです。単位制度を支える教育システムはどうあり得るかというようなご質問もいただきました。つまり、単位制度とその周りのいろいろな仕掛け、仕組みのことを全部組み合わせて考えなければいけないと思っています。むしろ必要なのは、私は単位制度を支える運営のシステムではないかと思っています。文科省には、法令に書いてある以上それを守れというようなDNAはあるのだろうと思います。それを大学がどう受け取るか、それにどう反応するかということがものすごくクリティカルだと思います。

大学が考えなければいけないことは、単位制度をア priori なものとすれば、そこから教員のロードを単位の原則から逆算するとか、研究もしろというなら研究のためにサバティカルをちゃんと与えろとか、入試、IR、その他のために専門職員を雇用するとか、非常勤の先生を多めに雇用するとか、そういうことはできると思うのです。ただしそれは、森さんではないですが、リソースがかかります。短兵急に15週45時間を厳格化してしまったわけですが、お金がなければ公論に付して、私はもう一ぺん、みんなで話し合うべきであつたらう、そしてこのシンポジウムがその機会だったと思っています。

(溝上) ありがとうございます。T先生のご質問も、E先生のご質問も、これと言って返せませんので、ご一緒に私なりに返したいと思っています。森さんもおっしゃいましたが、今日は単位制度が大きく中心のテーマになっていますけれども、何も単位制度だけで議論していこうというようにはなっていないわけで、実際に伊藤先生も澤登さんも、いろいろ単位制度に引っかけて、例えばオナーズとか、成績の評価とか、授業のコースシステムとか、いろいろな他のシステムを重ねて現場での改善努力をされていて、それを示してくれたのだと思います。

T先生がおっしゃるように、キャップ制を敷いても結局は機能しないということがあったり、あるいはE先生がおっしゃるように、15回やってそれが足かせになっているなど、いろいろ問題は出てくるのです。ですから、私がそういうことをいろいろひっくるめて、こういう場で思うこと、自分の立場として考えることは、とにかく学生の学習時間、特に授業外学習の伸びてくる部分に引っかけて、授業デザインを何とか変えていこう、とにかく私はもうそこだけ言っているわけです。

そこだけ言ってもらっても多分困るという話としていろいろおっしゃられているのだと思いますけれども、あとは、ある学部、ある大学の固有の状況で、例えば単位制度の縛りや、15回のことや、キャップ制の機能を、どう学生の学習時間が伸びるようにつなげていくか、システムをうまく全体として作り直していくかという試行錯誤を重ねてもらえないように思います。

本当に問題は多いですが、今日のお三方の事例も、私たちのこういう問題意識の中から、例えば松下が言いましたけれども、単位制度の大きな枠の中でここまでいろいろ変えてやれている、医学部は特殊かもしれませんが、いろいろ換算してこういうモジュール制を敷いているわけですから、そういう取り組みは、やろうと思ったら多分できるのです。だから、そういう事例をどんどん見ながら、あとはご自身の大学学部の現状に合わせて、私の関心で言

えば、どうすれば学生の学習時間が伸びるかという事例をいろいろ示していただければ、それをこうやって皆さんで共有して、政府レベルに返していくということもあるでしょうし、現場レベルでどんどん変わっていくことにもつながるかと思います。そういうことを重ねていくことしかないのではないかと、私は考えています。

(森本) 先ほどキャップ制の話が出ました。キャップ制はわれわれのところでも議論になったことがあるのです。一つは単位制の大きな問題として、われわれは教養の2年間でこれだけ単位を取ってくださいと、自宅での授業外学習を考えてほどほどの量を指定しているわけです。ところが、その気になったら、2年生でしか取れない一部の科目を除いて1年生でほとんど単位が取れるわけです。すると、めっちゃめっちゃ暇な2年生が出てきます。2年生でしか取れない医学英語に週に1回来るだけで、ほとんど2年生の履修が終わってしまう可能性があるのです。そうすると、そこで遊ぶ習慣ができてだんだん学校に来なくなるのです。そして3年生の専門科目でいきなり山を上るときについていけなくなって、そこで10人ぐらいドロップアウトします。医学部の定員は約100人ですが、4年生の119人中、単位が取れずに留年しているのが十数人います。キャップ制をしていないことで暇な2年生ができて、そこで足腰を弱らせてしまうのが一つの大きなデメリットだと思っています。僕はそこは何とかすべきなのかちょっと悩んでいるのですが、少なくともそこは一つ大きな負の側面ではないかとは思っています。

あと、週に2回の授業することの困難さをお話しになりました。それをすれば必ず泣く人が出ると思うのですね。たまたま医学部の場合は、各教授が「うちはこの時期だけさせてもらったら構へんわ」と言って、20コマをある時期に取るのですが、教授は1回しかせずにあとは助教とかに振るので、誰かが末端で泣くからこれを組めるのであって、自由なものは必ず泣く人が出ると思います。泣く人がいる前提でやれば可能だと思います。

(伊藤) いっぱい泣いているのです(笑)。15回という回数ですが、私は数学教育の立場でいいますと、あまり回数というか、時間数がちょっと一人歩きしているような気がします。どちらかという実質化しろということの先にあるのは、まず一つは、45時間分1単位で、もともと教える内容は時間で決めているので、その内容はきちんと教えなさい、その上でその内容を学生は身に付けて単位を取ってください、そうして実質化しなさいということだと理解します。つまり、工学部だと1年で単位を取ったとしても、4年で使えなければ工学部の先生からは「じゃあ、数学は要らないね」と言われますから、取った上でちゃんと使えるようになっていなければ取ったには入らないわけです。

もちろん15回90分をきちんとやった上で時間外学習をきちんとすれば、すべての人は身に付くのかもしませんが、これもまた個人差があります。非常によくできて、時間外学習をそんなに必要としない、もしくは授業を聞いただけでも必要とされるレベルには達する学生もいれば、全くそうではなくて、3倍も4倍も時間をかけないと習得しない学生まで非常に幅広くおられます。ですから、ある程度共通部分は授業でできるけれども、それ以外の部分はサポート体制をしっかりとした上で、必要な人には時間外学習を取るという、メリハリといいますか、学生それぞれに対応した体制を整えていけばいいのではないかと考えます。

(澤登) 数年前だったと思うのですが、館昭先生の論考を読んだことがあります(2006年/カレッジマネジメント140号)。先ほど森先生もちょっとおっしゃいましたが、高校を卒業して社会に出て働き始めた同じ世代の労働時間を単位に換算し、学事日程に落とし込んでみると、ああいう単位数、学習時間の数、授業の回数になってくるのではないかという趣旨の論考だったと記憶します。そういうことからすると、私自身はその15回というものが、学習時間においては個人的には妥当ではないかと思っております。

ただ、現場レベルの話をする、15回を確保するために、例えば火曜日に木曜日の授業をしたり、休日・祝日にも授業を実施したりと、現場レベルではそうしたことに伴ういろいろなことが発生していることも確かです。また、さきほど授業外学習時間向上のキャンペーンを3カ年実施したとお伝えしましたが、その期間中にかなり各先生方に工夫していただいて、一つの方法として、いろいろ宿題を出すようになりました。すると、ある非常勤の先生が授業で課題を出そうと思ったら、「ほかの専門科目でも課題がいっぱい出ているから、もう少し減らしてほしい」と学生からクレームが来たということを教務課に言ってきたりと、まだまだ学生側の認識の違いもあるのだと思います。

また、キャップ制度を私どもも完全に導入しており、文系でいえば大体20単位が各セメスターの上限となってい

ます。特に4月から5月にかけて新入生が時間割を編成した後、それを全保護者にも送っていますが、そのシーズンになりますととくに新入生の保護者からの要望が教務課に寄せられます。履修上限の関係で、例えばたまたま月曜日の2コマ目と3コマ目しか授業が入っていないと、「せっかく子どもが大学に行っているのだから、1コマ目や4コマ目など、ちゃんと無駄なく授業をさせてほしい」という主旨です。そこでまた単位制度の説明をしたりするのですが、本格的にいろいろなところで、学生も保護者もわれわれも教員も含めてあらためて「大学の学び」や「単位制度」そのものを考え、理解していかなければいけないのだろうというのが今の実感です。

(大塚) ありがとうございます。先ほど森さんの方から幾らかの論点ということで、時間で測る単位制度をあきらめて、別の評価のシステムを構築すべきかどうかという問いかけもありました。ただ、私自身は先ほどちょっと単位制度についての疑義も申しましたけれども、単位制度はもともと自由に学生が学習できるようにするという理念をもった制度であって、その点にはこだわりたいという部分もあるのです。つまり、学習指導要領みたいなものがしっかりあって、こうやって学んでいけばいいということがはっきりしている体系がある領域では、むしろ医学部のようなモジュール制の方が効果的かもしれません。けれども、それだけではなくて、今の学問領域の広がりの中で、京大は「自由の学風」という理念でやっていますけれども、自分でこれを選択したいという自由度が保障される単位制度は一つの有力な考え方かなと思います。ただ、その自由さを考えるとき、例えば、統計的に見れば、平均値にはその上下に散らばりがあっていいはずで、15回という基準自体は、そういう散らばりを認めるものであっていいのではないかなと思います。森さんが先ほど、100分を2時間とみなすと、時計時間的には1単位45時間×100/120で37.5時間というような計算もしてくれましたが、その程度を平均にして、1単位の学習時間は上下にバラツキがあっていいのではないかなと言うことです。授業回数で考えますと、15回×100/120で12.5回になります。3年ぐらい前の京大のある委員会で、京大でも「最近では8回しか授業をやらなければならぬ教員がいる。12回は授業をやらなければいけない」という議論があり、「15回やらなければならぬ」とならないことに、ちょっとずつこけたことがあるのですが、その辺を、平均にするのか、あるいは、ミニマム・リクワイアメントにするかは意見が分かれる部分かもしれませんが、いずれにしてもその程度の許容範囲というか、「遊び」を持たせる柔軟性があっていいのではないかなと思います。それに加えて、最終の試験日を加えれば、単位制の趣旨はそこそこ機能していくのではないかなと思ったりもするのですが、こういう考え方は甘いのでしょうか。

もう一つ、時間で計らない、こういう計り方があるというアイデアが、皆さんの方で何かあるのでしょうか？森さんは、まだその答えを持っていないと先ほどおっしゃっていましたが、ほかのこんなやり方はどうかというものはありますでしょうか。統一テストという例も紹介されていましたが、実は、昨日、授業評価ワークショップというのがありまして、そこに参加されておりました医学系の大学の先生が、実はそこにおられるのですけれども、その大学では、授業の目標が国家試験になっていってしまう、つまり国家試験に通るような授業がいい授業になってくる、大学の授業はそんなことでいいのかという懷疑が教員の方にわいてくるといったように、ある意味での悪循環も起こってくるということがあるという話しを紹介して下さいました。それできちんとした医者が育てばそれはそれでいいということかもしれない、結果的には本当に悪循環なのかどうかは分からないという部分もあるとは思いますが、統一試験ということもすべていいというわけでは決してないと思います。ということも含めて、何か時間に基づく単位制度に代わる評価のアイデアがあればと思うのですが、ここですぐにはなかなか解が出ないという感じでしょうか。医学系の例ということで、森本さん、どうでしょうか。

(森本) 試験など、アウトカムベースで授業を測ることは可能だと思うのです。でも、それと大学での教育は僕はちょっと違う気がするのです。アウトカムは多分メジャーすべきで、TOEFLを取ったり、そういうアウトカムで授業を評価することは一つの尺度ではあるのですが、それと教育とは違う。というのは、チュートリアルでのレポートがアウトカムだとすると、そのためだけにPBLは集まって、仕事を振って、そのまま解散してまた集まるという形になるのです。

学生は利口なので、アウトカムが統一試験とか国家試験であれば、簡単に股の間に携帯電話を入れて解答できますから(笑)。アウトカムだけではいけないような気がするのです、そこは何かいい工夫はないかなと思っています。比較

的、僕は学生との対話の授業を結構大事にしている、試験とはまた別にディスカッションすることで単位をあげたりしているのですが、そういうことが一つかなと思っています。

（大塚） ありがとうございます。その辺は森本さん、伊藤さん、澤登さんからご紹介いただいた事例の中にも、ある意味で「ハードスキル」という、これは2月にセンターが招聘いたしましたジェームズ・コテ先生の言葉を借りているのですが、いわゆる知識・技能的なものの修得の背景に、それをどう活用したらいいか、それがどのくらい大事なのか、そのことを自分がどのくらい修得できるという感覚といいますか、そういうソフト的な部分がありまして、「ソフトスキル」という言葉をコテ先生は使われていましたが、この面もやはり大学教育の大事な面であって、そんなことのすべてが単位制度の中に入れられるかどうかといったあたりも含めて、今後さらに議論していくべき課題は多く残されているだろうと思います。

京大におりますと、15回という文科省からのプレッシャーに対して、私は、京大が最後まで反発する大学になるかと思っていたのですが、今年1年は延びたのですが、早々と平成24年度からは夏休みの始まりが8月15日ぐらいになるという学事暦になるらしいのです。そんな流れに不満を持っている先生方も多いと思うのですが、そういう不満があるのであれば、もちろんその正当性に関わる理論武装もする必要はありますが、それに対してしっかりと戦っていかないと、どの大学もどの領域も「横並び」で上から言われるとおりに形だけこなすようになっていくと、それこそ日本の大学の質も低下していくことになりかねないと思います。そういう危機感をもって、今後もさらに、このような場を利用して、森さんの言葉を借りれば、「公論」の場を作っていければと思っています。

それでは、報告して下さった先生方に最後にもう一度拍手をお送りください（拍手）。ありがとうございました。

さて、今日はこの後の情報交換会は自粛させていただくことにしましたので、ここで主催者を代表しまして、私ども京都大学高等教育研究開発推進センターのセンター長の田中每実よりご挨拶をいたします。